

ささやまの森公園の生物調査

平岡 由翔・浦井 美緒 (兵庫県立篠山東雲高等学校 自然科学部)

はじめに

篠山東雲高校の近くの兵庫県立ささやまの森公園には、オオルリ(図1)やサンコウチョウ、アカショウビン、ヤイロチョウなどの貴重な夏鳥が見られる。そのことはSNSなどで野鳥愛好家の間で知れ渡り、野鳥愛好家にとっての聖地となっている。しかし、本格的な生物調査はできていないために、私たちが公園内で野鳥などの生物を調査することにした。



図1 オオルリ
(写真提供: ささやまの森公園)

調査方法

(1) 調査日

令和6年7月7日(日)、8月1日(木)、8月18日(日)、9月8日(日)

令和7年4月5日(土)・6日(日)、6月7日(土)・8日(日)、7月13日(日)、9月13日(土)・14日(日)

(2) 調査場所

兵庫県立ささやまの森公園 (丹波篠山市川原)

(3) 調査方法

ア、野鳥調査

公園内の環境の異なる4ヶ所(スギ林、アカマツ林、コナラ林、野鳥観察小屋)で10分間のポイントセンサス法により野鳥の姿、鳴き声を記録した。

イ、水生生物調査

公園内の溪流2ヶ所(水辺の広場、堰堤の上流)で30分間、たも網を使って水生生物を採集し、種類と個体数を記録した。

ウ、哺乳類調査

公園内の山中にシャーマントラップ(図2)を30個設置し、ネズミ類を捕獲して記録した。また、センサーカメラ(図3)を3ヶ所設置し、映った野生動物を記録した。



図2 シャーマントラップ 図3 センサーカメラ

結果と考察

野鳥調査では19種類の野鳥の姿や鳴き声を確認した(表1)。夏鳥はツツドリ、アカショウビン、サンショウクイ、サンコウチョウ、クロツグミ、キビタキ、オオルリの7種であった。ツツドリ、アカショウビンは今年の調査で初めて野鳥観察小屋で鳴き声を確認できた。しかし、サンショウクイは今年確認できなかった。ヤイロチョウは、昨年も今年も確認できなかった。

植生の違いにより、確認できる種が異なると思っていたが、大きな違いは見られなかった。それは調査地点が近く、確

表1 野鳥調査の結果

種名	科名	①スギ林		②アカマツ林		③コナラ林		④野鳥観察小屋		備考
		姿 (個体数)	鳴き 声	姿 (個体数)	鳴き 声	姿 (個体数)	鳴き 声	姿 (個体数)	鳴き 声	
キジバト	ハト科				○		○			
ツツドリ	カッコウ科								○	夏鳥
アカショウビン	カワセミ科								○	夏鳥
コゲラ	キツキ科	1	○				○	1	○	
アカゲラ	キツキ科				○		○			
サンショウクイ	サンショウクイ科								○	夏鳥
サンコウチョウ	カササギヒタキ科		○		○		○			夏鳥
カケス	カラス科		○		○		○			
ハシボソガラス	カラス科		○		○		○			
ハシブトガラス	カラス科				○		○		○	
ヤマガラ	シジュウカラ科		○	1	○	1	○		○	
シジュウカラ	シジュウカラ科		○		○		○	1	○	
ヒヨドリ	ヒヨドリ科	2	○	2	○	2	○	6	○	
メジロ	メジロ科			1				2	○	
クロツグミ	ヒタキ科		○		○		○	2	○	夏鳥
キビタキ	ヒタキ科		○		○		○	1	○	夏鳥
オオルリ	ヒタキ科		○		○		○		○	夏鳥
イカル	アトリ科				○		○		○	
ソウシチョウ	ソウシチョウ科				○		○			
種数		2	10	3	14	2	14	6	12	
		10		14		14		13		

認のほとんどが鳴き声のみだったので、別の地点で鳴いている個体もカウントした可能性がある。なお、ヒヨドリはどの地点でも姿を確認できているので、すべての地点にいることがわかった。

水生生物調査では29種類の生物を確認できた(表2)。魚類に関しては4種類でカワヨシノボリとカジカは堰堤の上流では確認できなかった。堰堤が魚類の移動を妨げていると考えられる。また、トンボの幼虫(ヤゴ)が少なくとも7種類生息していることがわかった。

哺乳類調査では、シャーマントラップにより、アカネズミ(図4)を5個体捕獲でき、センサーカメラではニホンジカ(図5)やイノシシ(図6)を多数撮影でき、なかでもニホンジカは6ヶ月で38回映っていた(図7, 8)。センサーカメラの調査を始めて6か月しかたっていないため、データ量が十分とは言えない。現在もカメラは設置しているので、今後の結果をふまえて考察を出していきたいと思っている。

表2 水生生物調査の結果

	調査場所	水辺の広場	堰堤の上流
	調査日	確認	確認
	No.	種名	
魚類	1	タカハヤ	◎
	2	カワヨシノボリ	○
	3	カジカ	○
	4	ナガレホトケドジョウ	△
両生類	5	タゴガエル	○
甲殻類	6	ザワガニ	◎
	7	ヨコエビ	○
昆虫類	8	カワニナ	○
	9	ヘビトンボ(幼虫)	○
	10	カワゲラ(一種(幼虫))	○
	11	チラカゲロウ(幼虫)	○
	12	モンカゲロウ(幼虫)	◎
	13	タニガワカゲロウ(幼虫)	○
	14	カゲロウ(一種(幼虫))	○
	15	ヒゲナガカワトビケラ(幼虫)	○
	16	ウルマーシマトビケラ(幼虫)	△
	17	トビケラ(一種(幼虫))	△
	18	オナガサナエ(幼虫)	◎
	19	オジロサナエ(幼虫)	○
	20	アサヒナカワトンボ(幼虫)	△
	21	ミヤマカワトンボ(幼虫)	△
	22	ヤブヤンマ(幼虫)	○
	23	ヤンマ(一種(幼虫))	△
	24	ムカシトンボ(幼虫)	△
	25	ヒラタドトムシ(幼虫)	△
	26	ヒシアメンボ	△
27	マツモムシ	△	
環形動物類	28	ヒル	△
線形虫類	29	ハリガネムシ	△
	種数	26	20

◎:1回の調査で10個体以上を確認
 ○:1回の調査で2~9個体以上を確認
 △:1回の調査で1個体を確認



図4 アカネズミ



図5 ニホンジカ



図6 イノシシ

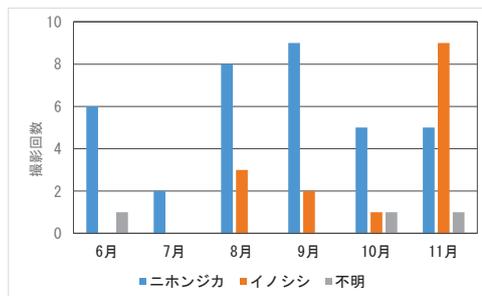


図7 野生動物の撮影回数(月別)

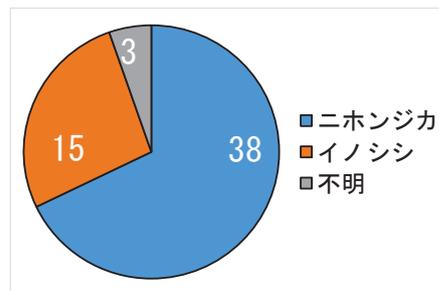


図8 野生動物の撮影回数(種類別)

謝辞

本研究は(公財)兵庫丹波の森協会が主催する「たんばユース躍動プロジェクト」により行い、丹波の森研究所の上甫木昭春様、京都府立大学大学院の福井 亘教授、ささやまの森公園の奥田 格様、兵庫県立大学大学院の明尾亮佑様をはじめ多くの方々にお世話になりました。

参考文献

- 1) 叶内拓哉・安部直哉・上田秀雄, 新版日本の野鳥, 山と溪谷社(2022)
- 2) 梅田 孝, 身近なヤゴの見分け方, 世界文化社(2016)
- 3) 小宮輝之, くらべてわかる哺乳類, 山と溪谷社(2023)